巻頭言

「失敗の数々　クリスマスの思いで」

学校長　酒　井　實　三

教諭時代に作成した教材やクラス通信を見返す事がある。見れば見るほど懐かしさより恥ずかしさがわき上がってくる。なんと自分は未熟な指導者であったことかと。

二十代後半、初めての担任、それも一年生。「よしやってやるぞ」という思いとは裏腹に全くといっていいほど失敗の連続であった。「何故これができないのだ」「俺はこれほどやっているのに」、生徒の気持ちや実態を考えず力ずくでこれでもかこれでもかと繰り返した。全くいまもって恥ずかしい限りである。

さすがに二回目はこれではいけないと、会話に遊びを、厳しさの中にも余裕を持つように心がけた。時には生徒と一緒に汗を流し、時には失敗する姿をあえて見せ飾らない姿を生徒と一緒に共有した。

日に日に生徒との関係が向上していった。

クラス経営がうまくいくと成績も向上し、国家試験等の資格取得者も増加。問題行動もほとんどなくなり好循環となっていった。

十二月のある日、きょうも一番のりでと学校に向かうと自分のクラスからうっすら赤や黄色に点滅する光が。おかしい、すぐにクラスに向かいドアを開けると、「サンタクロース参上」「よい子の皆さんにはお菓子をあげよう」と黒板に大きな文字、そしてクリスマスツリーとイルミネーションがチカチカ点滅。生徒の

机上にはお菓子。でも最後尾数名の机上には「ごめん、数を間違えた。ガムで許して」と。

クラスの数名が計画したサプライズといってよいのか、いたずらといってよいのか。担任として笑いあふれる生徒たちとの出来事であった。でも時間が経てば経つほど、思い出せば出すほどこのサプライズ、もしかすると私へのサプライズではなかったかと思うのです。

今年度、産振棟玄関横に設置されたイルミネーション